

選評

三田覚之

天寿国繡帳の原形と主題について

本論文は、奈良中宮寺に伝来する天寿国繡帳について、刺繍下地裂の調査に基づいた原形の復元案を提示し、さらに主題について図像解釈によりながら新たな見解を示したものである。

天寿国繡帳は現在、飛鳥時代のオリジナルの断片と鎌倉時代に複製されたものの断片が一つの画面に混在して貼り付けられた状態にある。そのことは従来の研究によって指摘され、紫と白の下地があることが解明されている。論者は、紫地が天寿国繡帳の主要な画面（内区）に対する白地が付属的な画面（外区）であると想定したうえで、現在バラバラに貼られている図像断片を一つ一つ丁寧に観察し、その下地裂の経系・緯系の方向を確認しながら、原形の画面構成の復元を試みた。

次に、文献史料と図像断片をもとに図像を復元的に組み立て、主題を解明する。天寿国繡帳の主要な画面となる内区については、『太子曼荼羅講式』に記された「四重宮殿」が中心的な図像であるとし、『弥勒上生経』における天宮、すなわち「善法堂（兜率天宮）」であるという解釈を示した。外区については、二人の老人・仏殿・舎殿中の人物などの図像から『弥勒大成仏経』を典拠とする可能性を指摘した。さらに、亀甲銘文の配置については、聖徳太子・穴穂部間人皇女・橘大郎女の三人の名を記した亀甲が繡帳の正面に位置し、あたかも三尊形式のように配置されたとする想定案を示し、名前を記した亀甲が礼拝の対象となった可能性についても言及し、太子信仰を考えるうえで興味深い問題を提示した。これらの図像解釈については、今後検討すべき課題が残されているが、膠着している天寿国繡帳の図像研究に一石を投じたものとして評価されよう。

天寿国繡帳に関しては、これまでも先行する研究があるが、本論はそれらを踏まえつつ、さらに研究を進展させている。とくに作品を染織技法の視点から詳細に調査・観察し、客観的なデータに基づきながら、作品の分析をおこなう研究方法は、美術史研究の最も基礎とするところであり、それを根拠として、これまで見落とされたり、見誤ったりされたところを補完しながらの復元案は説得力がある。主題についても先行研究を批判的に検証したうえで、新たな見解を示している。論者の作品に対する徹底した観察力から生み出された本論は、『美術史』論文賞にふさわしい論文として評価されるものである。